

| | |
|------------------|---|
| Title | アイヌ叙事詩 ユーカラの研究(金田一京助著, 東洋文庫刊行) |
| Sub Title | |
| Author | 松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1931 |
| Jtitle | 史学 Vol.10, No.3 (1931. 9) ,p.199(541)- 201(543) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310900-0199 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

アイヌ 叙事詩 ユーカラの研究 (金田一京助著 東洋文庫刊行)

東洋文庫論叢第十四之一、二として期待されてゐた金田一京助氏の「ユーカラの研究」が、公けにされた。氏が、ユーカラなるものの存在を初めて知つてから既に二十五年の歳日が流れて居るさういふ。其間に隠れて、孜孜として倦むことなく此世界の謎をも云ふべき古代的民族の紀念碑^{モニュメント}、ユーカラを採集し、研究し、これをついに絶滅より救ひ、世界の學術に絶大の功績を樹立された著者の不屈不撓の精神に對し、吾人は衷心より畏敬の念を禁じ得ない。

第一卷は、第一章 緒論「書かれざる文學」、第二章 アイヌの生活と昔話、第三章 アイヌの生活と歌謡、第四章 神々のユーカラ、第五章 英雄のユーカラ、第六章 オイナ、第七章 ユーカラ發見の歴史、第八章 ユーカラ口誦傳承の現状、第九章 起原的考察、第十章 結論「文學の黎明」からなつてをる。第二卷は、アイヌユーカラ語法摘要とアイヌユーカラ虎杖丸の曲の二部よりなり、前者は、一、音韻論、二、名詞、三、代名詞、四、形容詞、五、副詞、六、動詞、七、文章法の諸章に分れ、後者は、原文と和譯とを對照し、精密なる註を附してをる。

書評

第一卷に於て先づ最初に著者は、アイヌの宗教觀が特異なることについて述べ、その口傳文學は最初純宗教的であり、後次第に樂んで聽く歌謡へ轉向してきたと論じ、アイヌは、祖先を重んじ、昔噺は、その愛好なる所である。これは散文であるが、特殊な調子を持ち、普通の會話とは區別せられる。これにはアイヌ特有の昔噺と日本の影響を受けた和人昔噺との二種がある。そして前者は「下の者の昔噺」(詳しく云へば「上の者、下の者の昔噺」、即ち正直耶さん意地悪爺さんの話の類)を除いては自叙體で物語られる。アイヌは、歌を嗜む民族であり、なにかにつけ、歌ひ出し、祈禱、挨拶、會釋、爭論の辯論も皆即興詩的な一種の律語で述べられる。彼等の神々に關する短い様々の物語り歌は、カムイ、ユーカラ「神謠」と呼ばれてをり、叙述は、やはり第一人稱で展開する。そして句毎に繰返す折返が伴ふ。それより後の發達であるらしい英雄即ち人間のユーカラは、今日はユーカラの名を専らにしてをる。これは一切折返しなく、ポイヤウンペといふ一英雄を主題とし、矢張り一人稱で謠はれてをる。少年英雄ポイヤウンペの赤兒であるところから始まつて其の生ひ立ちを叙し、父母に別れて孤兒として育ち、或ひは肉親の兄とめぐり合ひ、或ひは衆人と競争して黄金のラッコを獲得し、之を嫉む諸部落が一味して奪略に來る戦端を發して戦が、第二、第三、第四の戦を生んで行く所謂幾戰記の戰物語(虎杖丸の構想)を成したりなごする。ユーカラの一種に女子のユーカラなるものあり、これは女子が曲中の主人公となつてをり、主として戀愛に絡んだ葛藤を謠つてをる。カムイ、ユーカラと形態が全く似て謠はれる内容が重大な信仰上の物語になつて

(五二)

一九九

あるものにオイナと云ふものがある。この主人公は、人界の主宰として天から降されたアイヌ初代の王なるアイヌラツクルであり、魔神を征伐し、この世を人間の棲みよい世とし、アイヌ生活の起源を開いた所以をこの文化神の自叙體に物語つてをる。

ユーカラが、日本人に知られたのは既に徳川時代に遡るが、その完譯は、一つもなく、明治十年代に至つて永田方正氏により「石狩アイヌユウカル譯文」一編が始めて物せられた。極めて淡い一小短篇であり、アイヌ文學の代表的な紹介として吾々の満足し得る程のものではないが、それでも兎に角前後を通じて是が只一度の邦人の手になる譯讀附きの記録であつた。ついでバチラー氏の採集となり、最後に著者の大蒐集となつたのである。

著者は、終りに臨んで、ユーカラ口誦傳承の現状を説き、これらの長篇の叙事詩が樂々アイヌ人により記憶せられ、長年月にわたり、比較的正確に保存される例證をあげ、古事記、日本書紀撰述の時代を今の心理で批判し、稗田阿禮の口誦・傳承を信ぜず、また古代傳説を個人の著作とし、これに衆人の信仰を認めなかつたりする今人の態度を否認し、また最後に「起原的考察」に於て、アイヌの叙事詩が、もも巫女の神語であり、従つて一人稱をもつて展開するのである。カムイ・ユーカラが、信仰上最も古く生れ、オイナに發達し、ついでポイヤウンペの長物語が生じて來たのであらう。但しアイヌのユーカラの發達には日本の古淨瑠璃の影響も有り得たらしい。しかしその内容は、全然アイヌ生活の古い信仰、習慣、土俗の結晶で日本の淨瑠璃と少しのか、はりも類似もないと結論してをる。

著者の永年にわたる研究の蘊蓄が傾倒せられ、アイヌユーカラの全相が、くまなく説明されてをる。通卷千四百五十八頁の彪大なる本書の至る所著者の新しき見解新しき發見に充滿し、實にアイヌ研究史上劃期的の大著述である。明治大正昭和を通じ、日本學界のみならず世界學界に不朽の足跡を印した述作の一に本書を推薦することを何人も否むものはないであらう。

聞く所によれば著者は、非常に多數の資料を有し、その全部の發表を見るには、氏の一生涯をもつて成就なし得るかを疑はれる程であると云ふ。吾人は、著者が、一日も早く學界にその資料を陸續發表せられんことを衷心より希望するものである。著者は、本書中にもアイヌの神話の研究は、之を別な機會に公刊する旨を述べてをられるが、恐らくその本は英雄ユーカラの研究よりも、アイヌ古代社會を窺ふ資料をより多く提供して呉れやう。英雄ユーカラには戰物語多くアイヌ生活の或一時代を示すものであるが、之をもつて全斑を見ることが出來ぬ。津田左右吉博士の如きその「思想」七月號に發表せられた「日本上代史の研究に關する二三の傾向について」の中に、本書を通じて見たアイヌの生活と日本上代の生活とがこころなることを指摘され、上代の日本人は概して平和の生活を送つてゐたらしく戰鬪を主題としたアイヌ人の英雄の叙事詩の如きは存在し得なかつたらうと論ぜられてをる。此見解の是非はさておき、アイヌの英雄のユーカラは、金田一氏も日本淨瑠璃の影響を受けたらしいとみられ、その後期の所産なることを認められてをる。日本の軍記物を通じて日本を見た場合何人も日本人を好戰的と解釋なすべく、或一形式の文學を通じてそ

の民族の全部の批判は出来ない。アイヌの叙事詩にも幾段の變遷がありしなるべく吾人は、その中でも古式を帯びたカムイ・ユーカラがアイヌ生活の研究に多くの資料を提供することを信じて疑はない。

著者は、本書の序言の中にその研究法について一言せられ、文化科學は、具體的個別的なものであり、統計的方法は役にたゞずと述べてをられるが、吾人は、此問題に關する全ての資料を比較し、綜合し、歸納し、統計的方法をもつて結論を得たい希望に堪へぬ。著者は非常な學術的良心をもつて一つ一つ正確な資料の提供を志してをられるのであらうと思はれるが、しかし、發表せられざる部分も、大體そのアウト・ラインを示され、その主題などの共通・特種等の區別を統計的方法で示していたゞくことは出来ぬだらうか。著者自身ユーカラの構想を論じ共通形式と異體とがいふ區別を述べられてゐるが、これは暗黙の中に氏自身が統計的方法をとつてゐられるのではなからうか。吾人は、この區別を數的證據を擧げて説明され、讀者を納得せしめらるる様な態度をすることだけはして文化科學の眞性質に違背するものではなく、却て科學としての正確さを増すのではないかと思ふ。然らざれば吾人は、提供された資料から學問的歸結を惹くことが容易でなくなる。叙事詩の研究にも或程度まで統計的方法の採用は必要なのではあるまいか。後進者として甚だ非禮僭越ではあるが著者の寛容を信じ、評者の希望を述べて蕪雜な紹介の筆を置く（松本信廣）。

高橋氏文考注

（大岡山書店發行）

記紀のごとき統一ある國史の編纂される以前には、家氏には、それぞれその由來や事蹟をのべたところの、纂記とか本系帳とか氏文とか稱せらるるものがあり、さうしてそれらがまた國史編纂の貴重な資料の一となつたであらう。その中氏文の例としては、本朝月令、政事要略、及び年中行事秘抄などに散見せる高橋氏文があり、その注釋本としては、伴信友の考注一卷が有名である。本書はこの伴氏の考注の復刻であつて、横山重・松澤智里兩氏によつて嚴密なる校訂を施されて新に公刊されたことは、古代文學及び古代史の研究者にとつて誠によることばしい次第であつて、この氏文が古代研究に對し極めて貴重であることは、他の書においては甚だ稀れなる古い宣命を傳へてゐることだけをみてもわかる。たゞ慾をいふならば、この氏文の由來とか性質とか、價值とかについての解説を附してもらへば、初學者にとつて一層便利であつたらうと思ふ。（松本芳夫）

南方土俗

（臺北帝大土俗人類學研究室內）
（南方土俗學會發行）

臺北大學の教授その他の盡力でこゝにいふ標題の雜誌が、發行された。移川子之藏氏のその蘊蓄を語る「紅頭嶼ヤミ族と南方に列なる比律賓バタンの島々。口碑傳承と事實」は、その第一號を飾る好論文である。まづヤミ族の口碑を述べ、バタンより渡來したりといふ云ひ傳へあることを述べ、日本の漂流記事、航海記によつてバタン島の土俗について語り、ヤミと同じきことを指摘し、つ